
【黒】を継ぐ者-共同竜生始めました-

燐葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【黒】を継ぐ者 - 共同竜生始めました -

【Nコード】

N5779R

【作者名】

燐葉

【あらすじ】

ふと気が付いたら、薄紫色の空が広がる別世界に俺はいた――

ゲームや漫画が大好きな、いたって普通な大学生の青年が、突然ファンタジーな世界に転生する！ 生まれた場所はなんと魔界、しかも種族は竜！？ 世界観や常識の違いに四苦八苦しながら、もう一人の自分と共同人生ならぬ竜生、始めます。

（息抜きに始めた小説です、行き当たりばったりでおかしい場所

も多々ありますが、どうかご容赦下さい（

プロローグ 前世と来世の邂逅

俺がこの世界で初めて目にしたのは、薄紫色の淡い空だった。

—— 事実は小説よりも奇なり。

どこの詩人が残した言葉かは忘れたが、それはまさしく真理だと、今の俺は肯定する。

いたって普通の家庭に生まれ、両親や妹と共に暮らし、大学に通って勉強して、ゲームや漫画などの二次元に少し…… いや、少なからず親しみ、そして友人と語らう。俺は、そんな何処にでもいるような男だった。

特別や天才といった存在に多少の羨望を抱きつつも、俺はただの一般人的な生活を享受していた。

当たり前の日常、当たり前の毎日。新聞で踊る事件の見出しや、ニュースで流れる騒動なんかを、どこか遠い所で起きた別世界の出来事だと切り離して。適当に生きて適当に仕事して、出来たら結婚なんかしてそして死んでいくのだと、漠然と考えていた。

一握りを除いて皆そうなんだから、自分もそうなるに違いない、なんて。集団性の心理と言うか、前に習えと言うか。恐らくそれが一番無難だからと無意識に思っ、そしてそうなるのだと信じていたのだ。

それがどうして、こうなってしまったのか……

眠りから醒める様に目を開けば、最初に見えたのは見慣れた自分の部屋では無かった。

俺の瞳に映ったのは、鮮やかな、薄紫。夜が明け朝が来る黎明に似た、けれど違う色の綺麗な空だった。

一瞬呆気にとられながらも、状況を把握する為にぐりと視線を巡らせる。こういう時は動き回っても状況が良くなる訳ではないし、体が重く余り動きたくない事もあってそれだけに留めた。

並び立つ木々の中に開けた草原、それが今俺のいる場所だ。葉がこすれサラサラと音を奏でるそよ風の中、突然大きな風が吹き、青々とした草の青い香りが鼻腔を掠める。

そして空から視界に飛び込んで来たのは、夜空に靡くオーロラのような虹色を秘める、流線型の黒く、大きな何か。

それは磨かれた金属の様に光を反射する、丸みを帯びた艶やかな黒。見る角度を変えると黒の上に様々な色を魅せる、とても綺麗なものだ。

目を離せずにそれを凝視していると、その黒い何かが俺の近くに降り立つ。視界いっぱい広がるその黒は、現実では有り得る筈のない姿をしていた。

蛇のような胴体に、爬虫類に似た四肢。鋭く光る角と牙、そして滑らかな皮膜の翼。ファンタジーの中に生きるドラゴン、そのものだ。

『ああ、起きたのね……私たちの愛しい子』

思わず思考が止まっていた俺の脳に、やさしく女性の声が響いた。それと同時に、ドラゴンが目を細めて、俺に顔を擦り寄せる。何故か、怖くはない。

金属の様でありながら、意外に柔らかなドラゴンの皮膚越しに感じる暖かさを、俺は無意識に受け入れた。漠然と感じるのは不安なんかじゃなくて、子供の時に母親から抱き締められた時の様な、絶対的な安心感。

記憶に無い景色。記憶に無い場所。そんな状況に置かれて、無意識に張り詰めていた緊張が解かれ、俺の意識が緩やかに遠退いていく。

『あらあら……まだ寝る事がお仕事だものね。ふふ、おやすみなさい』

優しく笑うその声に導かれるように、俺は目蓋を閉じた。

黒く塗り潰された世界の中で、俺は上手く動かない思考回路で今の事を考える。

最初は、夢の中で夢を見ているんじゃないかと考えた。当たり前だ、認められない。自分の世界から突然こんな場所にいるなんて、そんな事が有り得る筈がない。だから、コレは夢だと。

夢は脳が記憶の整理をする時に見える副産物だとか、無意識の願望を映し出す精神の鏡だとか。そんな良く判らない説を知識の海から引き揚げるが、同時にそれも否定する。

吹き付ける風、青い香り。そして何より、暖かな体温。実際に体

感じたその感触が、夢である事を否定した。

——現実的じゃない、信じられない。しかし実際に俺は此处にいる。

理解出来ない現状に苛まれ、不安と焦燥に駆られる。だがそれを理解する事は、今までの自分の日常に帰れないのを理解する事にもなる。だから、恐ろしくて行動を起こせない。

わかりたい、わかりたくない。知りたい、知りたくない。そのジレンマに、自分という足元を崩される恐怖を感じたその時。何も見えない筈の閉ざされた視界の中に、黒いドラゴンが現れた。

夜の闇に落とされた影を塗り固めた漆黒。先に見た竜よりは小さいが、それでも俺より一回り大きな黒い竜。

額に生える円錐形の角と、こめかみ辺りから後ろ向きに生える額のものより小さな角。そして背から生える、皮膜ではない刃物を束ねたような鋭い翼。

未だ成長途上とはいえ、竜として既に完成されたその造形に、俺は思わず見惚れてしまった。

『……初めまして、って言うのもおかしいかな、“俺”。私はシユヴァルツァイト・フォン・シャッテンⅡオブシディアン。長いけど、頑張って覚えて欲しいな』

「え？」

いきなりの自己紹介に、俺は間抜けな返答を返してしまう。

『はは、やっぱりするよね。大丈夫、ちゃんと説明するよ』

「いや、あつと、俺は」

『知っているよ。“俺”は、いや君は私だからね。君の名前も素性も性格も、全部。自分の事だから、わかって当然なんだ』

「……は？」

言っている事が理解出来ない。こうして別々に存在しているのに、俺と目の前にいるドラゴン——シュヴァルツァイト、が同じ存在な筈がない。

『私も最初は理解出来なかったよ、最近やっと認められたところなんだ。だから“俺”——君が来たんだろうね』

「……取り敢えず、きつちり説明はしてもらえるんだろうな？」

どうして思考を読まれたか、なんてそんなのも一々気にしていられないくらい、俺は混乱していた。

『教える相手が自分なんだから、それくらい当然だよ』

そう言つてシュヴァルツァイト——名前が長いので以下、ツァイトと呼ぶ——は、俺にとって分かり易く説明を始めた。

ツァイトは、魔界クルヌ・ギアに住む魔王を頂点とした魔族の、七色に分けられた種族の一、【黒】の位を持つ魔竜族当主の息子なんだそうだ。

魔界・魔族なんて言うからもつと混沌としているかと思えば、中世の貴族階級みたいなものが導入されているとの事。ただ肝心なのは血筋じゃなく、能力だとか。……話ずれた。

それで、俺とツアイトの関係なんだが……ツアイトは来世で、俺は前世の魂の大部分、らしい。俺自身の記憶にはないが、ツアイトには俺が死んだ瞬間の記憶があるようだ。

ツアイトの考察だが、輪廻転生における魂の循環の際に一番印象の残る死ぬ瞬間の記憶だけが精神に残って、他の記憶は器——脳が受け入れられるくらい発達する前に消えてしまう。

俺たちの場合は、人間より基本スペックが高い竜に転生し、且つ早死にだった為にツアイトに死以外の記憶が残っていた。それにより脳が早期発達して、前世の魂の記憶——つまり俺——が消える前に受け入れられる状態になったのではないか、との事。

そして生物が死を恐れるのは、死の記憶だけが残っていた事による無意識的なトラウマが……ってまた話ずれた。

実際の輪廻転生がどうなってるかは、存在するかもわからない神にしか知る事の出来ない部分だろうから、事実はどうでも良いんだが。

ツアイトの奴、余程暇だったんだろうな。脳が早熟、って事は寝るのが仕事な筈の赤ん坊が余り眠くならないって事だし。その代わり、赤ん坊の脳で20歳くらいの思考をするせい、頭痛が酷くて良く気絶してたとか……その頭痛と引き換えに急激に成長した脳のお陰で、今こうして俺がいる訳だけでも。

ちなみにツアイトの予測だと、ツアイトの記憶を俺が取り込んで、ツアイトの記憶を持った俺が“シュヴァルツアイト”になるはずだった。まだこの世界に5年しか生きていない——しっかりし過ぎて5歳とか信じられない——ツアイトの人格より、およそ20年掛けて成立している俺の人格が強いから、そうなるのは当然らしいが……俺個人としては、この世界で5年生きたツアイトという存在が俺

と同一とは思えないし、別の存在と認識してしまっているツアイトが消えるのも悲しい——俺が知り、俺を知っている存在がツアイトしかないからかもしれないが——ので、そうならなくて良かったと俺は思っている。俺がツアイトを取り込まない事で、ツアイトが持つこの世界に関する知識は手に入られないが、そこはツアイトが補佐してくれる事になった。

最初はツアイトに主導権を持たせる事を考えたが、ツアイトに対し俺の精神が大きい為に難しいようだ。ツアイトが俺の前に出てこれたのは、俺の精神がかなり弱っていて、一時的にツアイトが俺と並び立てたから。今は俺がツアイトを認識したから自由に出てくれるが、俺が拒絶したら出てこれなくなる——下手すると消える、らしい。

擬似的な二重人格で中二病みたいだが、ツアイトを失くすより痛くはない……と思う。

『思う、じゃなくて断言して欲しかったかな』

「……悪い」

『いや、良いんだけどね。私の存在を残してくれるだけでも、嬉しいんだから。いくら“俺”が私になると言っても、私自身ではないから……』

「そう、か……」

ふ、と流れる暗い空気を打破する為、そして今の生を生きる為に、俺はツアイトに手を差し出す。

「今から俺は、お前と一緒にシユヴァルツアイト・フォン・シャツ

テン〓オブシディアンになる“シュヴァル”だ。宜しく頼む、“ツ
アイト”」

『……！』

俺が差し出した手の平に、ツアイトはゆつくりと爪を重ねる。

『私は、今から君の半身になるシュヴァルツアイト・フォン・シ
ヤッテン〓オブシディアンの“ツアイト”。これから宜しくね、“
シュヴァル”！』

こうして俺たち“シュヴァルツアイト”の、ファンタジー世界に
おける不思議な共同人生——もとい、竜生が始まった。

プロローグ 前世と来世の邂逅（後書き）

初めましての方、初めまして！ またお前かの方、こんにちは、
燐葉です。

『夜闇は幽冥とワルツを踊る』の執筆が捗らないので、息抜きに
とこの小説『黒』を継ぐ者 - 共同竜生始めました - を執筆する
事にしました。

ドラゴン、魔法が大好きで、ファンタジーにそれは欠かせないだ
ろう！ と個人的に思う燐葉による、プロット無しの行き当たりば
ったり、チートではないけど強い竜に転生した元人間のお話です。
はいはい天麩羅天麩羅と思うでしょうが、これから宜しく願ひ
します（^^）

？ 新たな家族

過去（俺）と未来で現在を生きると決めた後、俺は“シュヴァルツァイト”としての始まりを踏み出す為に瞳を開いた。
そしてやはり最初に見えたのは、薄紫色の空だった。

『この魔界には、太陽も月も星もないんだ。だから地球の朝と夜みたいに、明るさが極端に変わったりしない』

記憶の中に残る自分の声より、幾分か高いツァイトの声が脳内に響く。その声に言葉を返そうにも、ドラゴンの声帯では直接言葉を発せず、よくゲームで聞くような鳴き声だけが漏れた。

よくよく考えれば、俺とツァイトは精神で繋がっているから心の中で思うだけで通じるのだ。もし言葉を出せたとしても、ぶつぶつ独り言を呟く怪しい存在になるだけだった事に、今気付いて良かったと思う。

『どうかしたの？』

（いや、別に。……しかしそうになると、魔界に時間の区別は無いのか？）

『一応あるよ。今の時間帯は朝で、もう少し経つと空がスカイグリーン……黄色混じりの薄い青緑色になって、昼。夜は夕焼けみたいな橙色。多少暗くはなるけど、灯りは要らないくらいなんだ。まあ、竜は目が良いから暗くても問題無いんだけどね』

（へえ……）

その説明に、随分と不思議な空だと言つのを認識する。改めて此処が地球ではない——異世界である事を、実感した。

やはり、話を聞くだけではどこか他人事のような気分は抜けなかったのだ。

（太陽も月も、星も無い……か。ならどうして明るいんだろうな、この空は）

『……ごめんね、私にもまだ分からないよ』

ふと気になった事をばやくと、言葉と共に意気消沈したツアイトの気持ち伝わってきた。

（別に責めている訳じゃない。まだ5年、だしな。分からない事はこれから一緒に知っていけば良いさ）

『そう、だね。ありがとう』

幾ら20年を生きた記憶があろうとも、この世界ではツアイトは5歳、俺はまだ産まれたばかりの赤子に過ぎない。知らない事は罪ではないし、これから先の長い旅路で知っていけば良いことなのだから。

それにまず、俺にはこの空より先に、知るべき事があつた。

ぐ、と力を入れて、横たえていた体をゆっくりと起こす。そして四足歩行で多少歩き回ったりして、体の調子を確かめた。

端から見れば酷く緩慢な動作だが、“人”と“竜”の構造の違いを考えれば、ここまですんなりと動く方が驚異的だと思う。“俺”としては初めてだが、魂の根本を同一とするツアイトが5年慣らしていたのだから、多少動きづらい程度で済んでいるのだろう。

人として存在しない器官（翼と尾）などに違和感を感じるが、慣れればどうにでもなるハズだ。

そうして異常なく体が動かせる事を確認して、一息ついた。翼があるのだから空を飛んでみたいのだが、ツアイトが言うに、翼で空は飛ぶが、翼を使って空を飛ぶ訳ではない。詳しい事はまだわからない、との事。無念だ。

思い出すのは、この世界で見た竜——恐らく、シュヴァルツアイトの母——の姿。俺（身長170半ばの人間）と比較して、ツアイト（5歳の竜）は凡そ2mを越えていた。そしてそのツアイトと比較して、母親竜は15mを越えていたように思う。

確か物理的には、人間は天使の様に背に翼を付けても飛べない。鳥が翼を使い飛べるのは、本体に対して翼がとても大きく、そして本体が非常に軽いからのハズだ。

しかし竜は違う。竜は羽毛ではなく鱗に覆われ、四肢は太く力強い。つまり、非常に重量がある。翼の大きさは本体と比べても大きいとは言いがたいし、母親竜の場合は何より、薄い皮膜だった。重量を支えるには、恐らく強度が足りない。

しかしそれでも、翼を広げ空を飛ぶのだという。——鳥と違い、羽ばたきはせずに。

故に、翼で空を飛ぶが、翼を使って空を飛ぶ訳ではない。きっと何か、物理学以外の部分で何かあるんだろう、と思う事にした。

何より俺の——“シュヴァルツアイト”の翼は、刃物を束ねたような鋭利で危険極まりなく、そして見るからに空を飛べないような翼なのだ。他の要因がなければ空を飛べないと言われているようなもの。せっかくのファンタジー世界なんだから、夢くらい見させて

欲しい。

……と言つのが、正直な本音なのだが。

(ところでツアイト)

『ん、何だい?』

(俺が見た竜は、今生の母親で、間違いないんだよな)

翼に関する考えを軽く纏めた所で、その考えに至る理由となった竜の事をツアイトに確認する。

『そうだよ。私の……いや、私たちの新しい母様』

ふと思ひ出すのは俺たちの長い名前。もう既に忘れそうだが、俺たちには“シュヴァルツアイト・フォン・シャッテン”オブシディアン”と言う、地球でいうドイツ式みたいな名前がついている。

中世の貴族階級が云々とは言っていたが、名前と家名の間に“Von”とますますそれっぽいと思う。何故ドイツ式かは不明だが。

(……やっぱり名前長いのか?)

『ノクトウルナ・テネブラエ・フォン・シャッテンだよ。頑張つて覚えてね』

(今度はラテン語か……)

別に覚えるのは苦ではないが、この世界がますます不思議でならない。

(……む？ オブシディアン、はどこに消えた？)

テネブラエが母親の家名としても、俺の家名シャッテン〓オブシディアンの後半が消えるのはどういう事なんだろうか。

『父様の名前にはあるんだけどね……あ、フェブルアーリア・フオン・シャッテン〓オブシディアン、と言っただけど』

(つまり不明、と)

『詳しくはわからないけど、父様は周りからオブシディアン卿、とか言われてるみたいだから……そういう関係なんじゃないかな？』

(思いつ切り責任のある立場っぽいじゃないか……)

こうしてツァイトから新しい家族の事を聞いていると、突然空から2つの大きな影が迫る。見上げれば、空からゆつくりと降りる二匹の黒竜。

一匹は見覚えのある、闇夜に揺れるオーロラを纏う黒竜。俺たちの新しい母、ノクトウルナ。

もう一匹は、20mは在るかという体躯の、銀の煌めきを内包する黒竜。例えるならば、夜に降る粉雪。この黒銀竜は、俺たちの新しい父親、フェブルアーリアなのだとツァイトが教えてくれた。

話をすれば影、というやつか。此处に、俺の新しい家族が揃う。

『起きていたのね、私たちの愛しい子』

頭にまず響いたのは、ツアイトと出逢う前に聞いた母の声。

『ヴァルツ、久しいな。元気にしていたか？』

次に響いたのは、包容力を感じさせる低めの男——父の声だ。

両親の言葉に声を返そうにも、直接思念を飛ばす方法が解らず困惑し、思わず微かな鳴き声が口から洩れた。ツアイトと話す場合は、話す事を考えれば伝わっていただけに尚更だ。

『ああ、そうか。ヴァルツは聡い子だから忘れていたが、魔力の扱い方はまだ知らないんだったな』

『そうですよ、あなた。忙しいのは解りますが……』

『すまなかったな、ルナ。ヴァルツも。これから先寂しい思いはさせんぞ』

そう言っただけ父は、母と俺に順に頬を擦り寄せた。ツアイトの育ちから見て悪い両親でないのは解っていたが、実際に見ると本当に良い両親で、俺は幸せだと思った。

『……さて』

俺にとって初の対面が済み、家族の団欒が一息付いたところで、父は背筋を伸ばし俺に向き直った。

『そう、ヴァルツは聡い。産まれてまだ5年だと言うのに、竜と

しては非常に早熟だ。我々の言葉も良く理解している』

『母として誇らしいわ、とてもよい子だもの』

『そこで、だ……ヴァルツ』

改めて呼ばれ、思わず首を傾げる。ツアイトも良くわからないように、困惑する気配を感じた。

『私もルナも、お前の声が早く聞きたい。話をして、色々な事を学び、立派に育って欲しい。だが、こうして会話をするには魔力というものを知らなくてはならない』

『あなた、まだそれは……』

『大丈夫だ、ヴァルツはきっと理解している』

魔力。ああ、本当にファンタジーだ。

しかしこうして意思確認をしている以上、教えるからやってみろ、で済むような簡単な話じゃないんだろう。

俺は父の目を見返して、話の続きを促す。

『魔力を知るのは簡単だが、扱うには危険が伴う。方向性の無い力は自分に返るからな。それが理解出来なければ、教える事は出来ない』

子供の好奇心で遊ぶのはダメだ、きちんと使わないと暴発するぞ、ということか。俺が言うのもなんだが、5歳に理解出来るとは思わないぞ。

『ほら、心配いらないだろう?』

『そう、ね』

……二人とも、何でそう思った。

内心そうばやけば、ツアイトから『考えるような仕草してるからね』と返ってきた。思考がそのまま態度に出ていたらしい、気を付けよう。

『大丈夫だヴァルツ、私もいる、ルナもいる。お前は間違わないだろう?』

確信に満ちた瞳で、父は俺を見る。期待されている以上、男として引くわけにはいかない俺は、大きく頷いた。

『それでこそ私とルナの子だ』

その反応に満足したのか、父は目を細めて笑う。そして空を見上げるように顔を上げた。

つられる様に空を見れば、そこには直径3m程の水晶玉がゆっくりと降下してくるところだった。

『フェブ、あなた、最初からそのつもりだったのね?』

私に相談も無しに! と、それを見た母が尾で軽く父の背を叩いていた。

母の反応を見るに、この巨大な水晶玉は魔力をどうにかする為のもので、前々から用意しなければいけないのだろう。

後でゆっくり話し合いましょうね、と母はお怒りだ。父よ頑張ってくれ、とその光景を俺は忘れる事にする。

それにしても、魔力か……楽しみでもあるし、不安でもある。けど、やらなきゃ始まらない訳だしな。ま、とにかく頑張ってみよう。澄んだ透明の中に様々な色を映す水晶玉を見つめながら、俺はそう決意した。

？ 新たな家族（後書き）

前話を見てくださった方、お久しぶりです。今回初めての方、初めまして燐葉です。

前回からかなり時間が開いてしまいましたが、如何でしたでしょうか。

今回は“シュヴァルツアイト”の両親の話と、ファンタジーならではの要素、“魔力”に関する話の導入でした。

今回は魔力と魔法に関する話になる予定です、定番ですね！
宜しく願います。

P・S

PV500、ユニーク200突破しております。また、お気に入り登録を下さった方もいらして……まだプロローグだったのに感激です。ありがとうございます！

これから先どうなるか私自身も不明ですが、ご期待に叶うよう頑張っていきたい次第です。宜しく願います。

以下、チラ裏逝け的独り言！

個人的な話だが、キャラクターのプロフィールを小説上に上げた気持ちがある。けど、話の腰を折る可能性が高く入れがたいと思う。

それから、俺の創るキャラは俺の好みの型にハマった奴ばかりで、新しい風が入らない。意識してても気付いたら似たタイプの量産。バリエーションが欲しい。

気が早すぎてどうなの？と自分でも思うが、シュヴァルツアイトを版權世界に飛ばして二次創作したい。トリップでも転生でも憑依でもいい。けど何の作品に飛ばせばいいやら。

先ずは、目指せ完結、ハッピーエンドッ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5779r/>

【黒】を継ぐ者-共同竜生始めました-

2011年9月7日20時12分発行